

心のかけらは無限大

文／中野香織 (服飾史家)

まだメールもLINEもなかった時代、おびただしい量の手紙をもらい、それ以上の手紙を書いた。いまは郵便といえば、DMやイベント案内や請求書くらいだが、当時は手紙がメインで、手書きで宛名が書かれた封筒の中には「心のかけら」が入っていた。郵便配達のパイクの音が毎日、待ち遠しかった。一昨日会ったばかりなのに「あとから思いついた話」を便箋3枚くらいに書いて送ってくれる友人もいた。

いただいた手紙の大半は、幾度かの引っ越しを経るうちにどこへ行ったのかわからなくなったが、いままなお、机の引き出しの片隅に眠っている何通かの手紙がある。30年も40年も経過しているのに、インクは変色し、便箋も封筒も乾燥が進んで、カサカサしている。

でも、そこに書かれた文字の形や大きさ、筆圧、文字間隔、文字の訂正のしかた、便箋の選び方扱い方に、まぎれもない「その人」が息づいている。すでに鬼籍に入った人も、手紙の中では、生きているのだ。封筒から手紙を取り出し、開くと、その人が立ち現れる。デジタルの文字には、ここまで有機的に人を召喚する力はない。

この原稿を書くために久しぶりに開いてみた手紙は、22歳の時にもらったものだった。「二人合わせて50歳。一人だけなら28歳と22歳の知恵しかないが、二人寄ることで50歳の知恵になる。二人合わせて三メートル強、肩車すれば壁越しに女風呂だってのぞける。一人の男+一人の男=二人の男だけど、一人の男+一人の女=無限大！」

現代のSNSなら「いいね！」より「爆笑」の顔マークがたくさんつきそうだ。まだLGBTQに対する配慮が社会課題として浮上していなかった時代のことゆえ、今ならば「一人の男+一人の男=無限大」とい

うケースもある。そのあたりは時代を考慮して見逃がしてあげよう。

この手紙に対し、どのような返事を書いたのかは、さっぱり覚えていないし、私が出した手紙も残っていないだろう。送り主は今どこで何をしているのかも、知らない。長い年月が経過した。それでも、この手紙は、その時、その瞬間の気持ちを思いつく限りの最高の表現で文字に変え、冷めないうちに封をして贈られた、世界に一つの宝である。一瞬の気持ちの高揚がインクによって結晶になり、永遠になったものだ。

長い年月といっても、その中を流れる時のスピードは速く、次男はもうすぐ私がこの手紙をもらった年になる。彼がだれかに気持ちを伝えたくになったら、それはLINEで伝えられるのだろう。これはこれで、スタンプの選び方、返信のタイミングや絵文字・顔文字のあしらい方に、その人らしい息づかいが表れる。LINEは既読になったかどうかやレスポンスのタイミングが気になるけれど、手紙ではそんな心配から少しだけ解放される。しかも、時間が経ったとき、自分が書き送ったデジタル文字を自分のデバイスで見るとは顔から火が出るほど恥ずかしいが、手紙はもう手元がないので、その心配にも及ばない。わざわざコピーをとっていたら別だけど。

コミュニティに向かって書かれたSNSの言葉ではなく、たった一人のだれかに向けて書かれた手紙に、おそらく取り繕わない心の真実のかけらが残っている。

考えを伝え、愛することには相手が必要。一人、机に向かって手紙を書いている時間は、孤独ではない。自分の心に沈潜しながら、だれかを思い、心の中で会話している。豊かな思索と愛に満たされた時間がそこにある。